

25

教科書について

医療の
小ネタ

研修医の地域医療の研修を受け入れたとき、病院ではできない経験をしてもらおうと考えました。病院ではすでに診断のついている患者さんばかりを診ているので、ウチではまっさらの状態と患者さんと接してもらおうことにしました。これをファーストタッチと言います。

当院では受診した患者さんにまず病歴を書いてもらいます。病歴というのは、いつから、どこに、どのような症状があるかという自覚症状の経過です。研修医はそれを見て患者さんの診察を行い、ポイントとなる他覚所見を用紙に記入します。その時点で第一のTentative diagnosis（暫定診断）を記入し、必要だと思った検査（レントゲンや心電図や採血など）をオーダーします。検査結果が間に合えば第二のTentative diagnosisを記入し、僕に回します。用紙の一番下にFinal diagnosis（最終診断）を書く欄があり、それを記入してから研修医に返します。

診察が終わってから、研修医が気になった症例につきディスカッションをしました。が、研修医はどうしても教科書に依存する傾向があります。そのようなときは、「患者さんが最高の教科書だからね」と繰り返し説明しました。それは教育的な意味合いの行為ではなく、僕自身が今でも日々実感している事柄です。そして多くの研修医が、1か月の研修の最終日に、感謝の言葉と共に“最高の教科書”について語ってくれたことは、今でも嬉しい思い出です。

ちなみに僕がいままで買った教科書で一番高かったのは「ハリソン内科学」です。とても分厚い本で、「本書はもちろん教科書であるが、それより重要な用途は、枕である」という、当時の志学書店の店員の手書きの葉が添えられていました。おらかな時代でしたね^^

内容もユニークで、不完全右脚ブロックの治療法の項目にはただ一言、「患者さんに言わないこと」と書かれていました。病的意義が無いので、病名を患者さんに告げて無用な不安を与えないように、との気遣いを、サラリとアメリカンジョークに包んでいて、初めて読んだときは「カッケ〜！」と思いました。